

神になった無法者

——岩手県下閉伊郡山田町の島の坊伝説をめぐって——

橋 弘 文

はじめに

民俗社会において、並外れた身体のもつ人びとは、かれらの異常な身体力を、おもに日々の労働に発揮した。かれらは、ふつうの人にはもつことができないような重量の荷を運び、あるいは驚くような速さで長距離の道を走った。また、かれらのなかには相撲や剣術などの格闘技に卓越した力を表した者もいた。並外れた身体のもつ人びとは、仕事やスポーツにとてつもない力を発揮して賞賛的になった。しかし、いっぽうで、かれらのなかには悲劇的な結末をむかえた者もいた。並外れた身体のもつ人びとは、かれらの異常な身体力のために、異人視され、村落共同体から排除されることがあったのだ。とりわけ、並外れた身体のもつ人びとが、よその土地からやって来た者の場合、そうした傾向が強く、かれらは殺害されることさえあった。たとえば、佐々木喜善は、大正9年(1920)に、つぎのような伝説を岩手県下閉伊郡山田町で聞いている。

昔の話である。閉伊郡山田の関口の岩窟の中に、どこから来たか一人の大入道が来て住んでいた。桐の御紋のついた鍋などをもって、誰言うとなく島の坊と呼んでいた。

ある時土地の者どもが、坊の留守中に岩窟へ行って、鍋の中に糞などをして悪戯をして帰った。すると坊はひどく怒って、山田の町に下って来て放火をしたりして暴れ廻った。そこで捨て置けず捕手が差し向くと、坊は大きな棒を手にして一枚歯の高下駄を履いて、町屋の屋根などを自由自在に飛び歩き、その態はまるで神のようであった。けれども遂に衆人のために撲り殺されてしまった。

ところがそれからは浜に漁がなかった。誰言うとなく島の坊の怨霊の祟りだと言うようになって、大島という所に葬った屍体を掘り起して、大杉神社に移して祀った。後に専ら漁夫の神となった。¹⁾

島の坊は山田の町に来たよそ者である。かれは山田の町の人びとの悪戯に怒り、山田の町を暴れ回る。ここで島の坊は山田の町の人びとから無法者とみなされることになる。並外れた身体のもつ島の坊の暴れぶりは、「まるで神のよう」に荒々しい。無法者となった島の坊は、殺害され、山田湾内にある大島に埋められる。島の坊の死後、不漁が続く。島の坊の怨霊が、その不漁の原因とされ、島の坊は、大杉神社に祭祀され、漁夫の神となる。

佐々木喜善は、この島の坊の伝説は、「トウセン坊系統の御霊信仰から出た譚であろう²⁾」とのべている。たしかにトウセン坊と島の坊は、ともに並外れた身体のもつ無法者であり、そして二人とも殺害された後、怨霊から御霊へ祭り上げられている。しかし、御霊化のプロセスは、おのおのの伝説の伝承地において、ちがってくると思われる。この小文では、島の坊の怨霊が御霊化されてゆくプロセスに焦点を合わせて、島の坊の伝説を読み解いてゆくことにする。

1 関口に住むよそ者

佐々木喜善の『聴耳草紙』版「島の坊」伝説によれば、島の坊は、よその土地からやって来て、山田の関口の岩穴に住んでいる。島の坊が住んでいた岩穴のある関口は、現在の岩手県下閉伊郡山田町関口に当たる。山田町は三陸海岸の一部を構成する山田湾に面しており、関口は山田湾にそそぐ関口川の中流域に位置している。

『山田町史 上巻』³⁾などによれば、山田は海岸部よりも背後の山間部に近い関口から人びとが住みはじめるようになったという。

明和9年(1773)に、修験の孫三郎が関口の八つがれ松山に不動明王を祭祀する本宮を建立した⁴⁾。関口の本宮は修験の修行場になっていたようである。関口には、修験の旅行者がたえず滞在していたと思われる。

山田町の武藤清氏によれば、島の坊は修験者であり、山田に来る前に、大槌のなんめい沢の関家という家に滞在していた。ある日、島の坊は北の方(山田の方)に行くと言って、記念に鏡を関家に贈り、立ち去ったという⁵⁾。島の坊も、関口の本宮で修行する修験の一人だったかもしれない。

『聴耳草紙』版「島の坊」伝説は、佐々木喜善が大正9年に山田でおこなった聞き取りをもとにしているが、佐々木喜善は、それ以前にすでに「島の坊」伝説を聞いて記録していた可能性がある。佐々木喜善が昭和8年(1933)に亡くなった後、昭和10年(1935)に『遠野物語 増補版』が出版された。この『遠野物語』の改訂版の大きな特色として「遠野物語拾遺」の追加があげられる。「遠野物語拾遺」は、佐々木喜善の原稿を、柳田国男と鈴木棠三が書き改めたものとされている⁶⁾。「遠野物語拾遺」107話につきのような伝承が記録されている。

下閉伊郡の山田町へ、関口という沢から毎市日の様に出て来ては、色々な物を買って戻る男があった。顔中鬚が濃く、眼色が変わって居るので、町の人はいはただの人間ではあるまいと言って、殺して山田湾内の大島に埋めた。其故であったか、其年から大変な不漁が続いたと謂う。是は山田町へ駄賃づけに通うて居た、土淵村の虎爺という老人の若かった頃の話である。⁷⁾

「遠野物語拾遺」107話では、島の坊と推定される男性は、市の日に関口から山田の町へ現れ、市で買い物をして関口へ帰ってゆく。その男は、「顔中鬚が濃く、眼色が変わって」いた。柳田国男は、大正3年(1914)に久米長目のペンネームで書いた「山人の市に通ふこと」において、山人と里人との交易の事例として、つぎのような「佐々木氏報」の話を提示している。

陸中の海岸大槌町の市の日に、語の訛近在の者と思はれぬ男、毎度来りて米を買つて行く。この男丈高く眼

は圓くして黒く光れり。町の人はいこれを山男だらふといつてゐた。⁸⁾

「佐々木氏報」の佐々木氏は、佐々木喜善のことであろう。大槌町は山田町の隣に位置している。佐々木喜善か柳田国男のどちらかが大槌町と山田町を混同したとするならば、佐々木喜善はおそくとも大正3年(1914)の時点で島の坊伝説のヴァリエントを聞いていたということができよう。

ところで、関口の岩穴には、島の坊のほかにもよそ者が住んでいたことがある。そのよそ者は長髪仙人と後によばれ、死後、かれの碑が山田町内に建てられた。長髪仙人の碑をめぐる、つぎのような伝承が伝えられている。

当町境田町川村家氏神稲荷社境内登道にある。今より百五十年位前文化の頃関口奥不動尊岩窟内に総髪(長髪)の武士が隠棲していた。里人等奇異に思いその留守中彼の居を探したら此辺稀に見る持物等があった。此事を知った彼は怒って里人を威嚇したので里人是を恐れ村の顔役に告げた。そこで部落民一同相談の上捕縛して役所に差出すことにきめ、彼の来るのを待ち受け釜谷洞で是を襲ったが彼は多勢を避け寺山杉林内に逃げこみ、武技に長ぜる彼を捕えることが出来なかった。そこで境田の住人村上某という偉丈夫が立向ったが中々の剣士で危く見えたが次第に疲労し彼が木の根につまづいた機に乗じて村上某踏み込んで彼に切りつけ切害した。彼の隠家を臨検するにその持物に尊きあたりの紋章あり。その持物は村上某家に保存してあると云っているが明らかでない。村民その後難をおそれ此事の口外を堅く厳禁し密かに葬り後別記のような碑を建てて弔った。後此の碑が捨てられたと同様で人々に顧みられなかったのを法印後飯岡小学教師内沼三五氏は今の地に移転して弔ったものと云う。⁹⁾

長髪仙人はべつのヴァリエントでは、「かみなが(髪長)さん」とよばれ、髪長さんは、大槌代官所から派遣された捕吏によって、捕らえられ、文政3年(1820)12月27日に処刑されたと語られている¹⁰⁾。

島の坊の伝説と髪長さんの伝説のあいだには、多くの共通点がみられる¹¹⁾。島の坊も髪長さんも、よそ者であり、二人とも関口に岩穴に住んでいた。どちらも山田の人びとと争いになる。島の坊も髪長さんも、けんかが強く、山田の人びとは大勢でかかっても、なかなか打

ち負かすことができない。そして最後にはどちらも殺害される。

いっぽうで、島の坊の伝説と髪長さんの伝説のあいだには、相違点もある。まず、両者の生きた時代がちがうといわれている。島の坊のほうが、髪長さんよりも古いと伝えられている¹²⁾。つぎに、髪型がちがう。髪型がちがいは、生業のちがいを示している。「大入道」や「坊」とよばれる島の坊は、僧形の人間として語られるが、髪長さんは、どこかから流れて来た武士と語られる。僧と武士のちがいは、けんかのしかたにも表れる。島の坊はもっぱら腕力をふるい、髪長さんは剣術の達人である。そして島の坊の伝説と髪長さんの伝説のもっとも大きなちがいは、かれらの死後の伝承にみられる。島の坊は死後、怨霊となり、そして大杉神社に祭祀される神になるが、髪長さんは怨霊にも神にもなっていない。

2 殺される島の坊

島の坊は、なぜ殺されなければならなかったのか。『聴耳草紙』版の「島の坊」伝説では、山田の人びとが島の坊の住居にいたずらをしたことから、島の坊と山田の人びとのあいだに争いが起こったと伝えている。『山田町史 上巻』は、「漁民との間に感情の衝突があり」、「撲殺され湾内の大島に葬られた」とのべている¹³⁾。また、あるヴァリエントでは、島の坊は酒が好きで、酒を飲むと山田の人びととけんかをするのがたびたびあったので、山田の北浜の漁師たちが、島の坊をだまして大島に連れてゆき、そこで島の坊に大酒を飲ませて置き去りにし、飢え死にさせたと語られている¹⁴⁾。「遠野物語拾遺」107話では、山田の人びとは、島の坊は「ただの人間ではあるまいと言って、殺して山田湾内の大島に埋めた」と語られている。いずれにしても山田の人びとが島の坊を殺した理由は明確には伝えられていないが、さまざまな島の坊伝承は、島の坊の殺害の背景に、島の坊がよそ者であることとかれの異形性を共通して語っている。

近世後期の山田は三陸海岸の漁港として栄えていた。近世後期の山田は閉鎖的な集落ではなく、よそ者が日常的に立ち現れる町場だったと思われる。通常、よそ者が、島の坊のように殺されることはほとんどなかったと思われるが、山田が異常な状態に置かれたとき、よそ者の身は危うくなった。

たとえば、元和年間(1615~1624)から天保年間(1830~1844)までの山田の出来事を記した「柳沢家文書」¹⁵⁾

に、つぎのような出来事が記録されている。享和2年(1802)年2月25日の夜に、山田の濱田藤兵衛の家が大勢の人びとに襲われるという事件が起こった。濱田藤兵衛の家は、他領地から流入した米の口銭を取り立てる役目を藩から委託されていた森岡四ツ屋丁平兵衛の事務所兼宿所となっていた。濱田藤兵衛家襲撃事件は、大槌の代官所に届けられ、材津右エ門という役人が、襲撃した犯人を捜索するために山田に来た。山田の名主たちは相談の結果、男鹿郡生まれで山田に住んでいた平治という塩売りを金15両で身代わりにたてることにした。よそ者の塩売りがスケープゴートにされたのである。

もしかすれば、島の坊は、山田が何らかの危機的な状況に置かれたときに、よそ者であるという理由から、殺害されたのかもしれない。あるいは、逆に、山田が危機的な状況に陥ったときに、異常な死を遂げた人びとのなかから、よそ者であるという理由から、島の坊の死が思い起こされて伝説化されるようになったという可能性も考えられる。

3 島の坊と大島

島の坊が埋められたと伝えられる大島は、山田湾の中央に位置し、島の東西には砂浜があり、島には古松老杉が鬱蒼としていた。大島には桜の木もあり、爛漫の春の花景色が見られ、秋には木の葉が霜に染まり、大島は錦色におおわれた。風光さわめて佳なる大島からの眺望は抜群で、海上に目を向ければ、幾多の漁船が鏡のような穏やかな海面を往来する光景があり、陸上に目を転じれば、霞露ヶ岳、鯨山、熊立山、十二神山などを望むことができた¹⁶⁾。

この大島には弁財天が祭祀されていた。寛政10年(1798)に、山田町の飯岡家の先祖の甲斐谷弥助が、安芸国厳島、近江国竹生島、相模国江ノ島、そして仙台金華山の霊石を島内の土中に一つずつ埋め、その上に弁財天社の石宮を築いて再興した。飯岡家は大島の弁財天社の別当をつとめ、毎年、旧暦8月15日に一族が集い、祭りをおこなってきた。大島の弁財天に関連する記録など飯岡家に伝わる文書は、明治28年(1895)の津波によって、すべて流出してしまったという¹⁷⁾。平成5年(1993)に、弁財天社の石宮の祠から一つの小像が発見された。飯岡家の人びとが、その小像を盛岡で鑑定してもらったところ、その小像は弁財天像と確認された。

山田の町の人びとは、盆行事の最終日を大島ですごした。人びとは各家の船で大島に渡り、ジャガイモを煮て

食べたり、泳いで遊んだりしたという。

大島の位置する山田湾は17世紀前半に歴史的な出来事の舞台となる。オランダ船プレスケンス号が山田湾に入港したのである。「柳沢家文書」によれば、寛永20年(1643)年6月、オランダの黒船が山田湾に入ってきた。湊越中という者が盛岡へ早飛脚で行ったという¹⁸⁾。関口の深山大権現社では、このオランダ船を捕捉するための祈願がおこなわれた¹⁹⁾。オランダ船プレスケンス号の船長をはじめ10人の船員が、捕らえられ、盛岡経由で江戸に送られ、幕府の取り調べを受けた。その間、プレスケンス号は山田湾に停泊していたが、山田の人びとは毎日のようにプレスケンス号を見物に行き、乗船して物々交換をしたという²⁰⁾。

昭和50年(1975)8月に山田町では「オランダ島まつり」が開かれた。大島は、オランダ船プレスケンス号の入港という歴史的な出来事から、オランダ島とよばれるようになった。

明治2年(1867)にロシア艦隊が山田湾に入港した。その折り、水死したロシアの水兵の死体が、大島の東岸に埋められたといわれている²¹⁾。

昭和50年(1975)8月20日、立正佼正会の井上君枝釜石教会長が、そのロシア人水兵と島の坊の供養塔を大島に建て、慰霊の法要をおこなった。立正佼正会の釜石支部長の柏館信枝さんが、外国人の姿を夢に見て、うかばれない外国人の霊を大島のあたりに感知したので、山田町の史家の阿部直吉氏に尋ねた。阿部直吉氏がロシア水兵の一件と島の坊の伝承を教えたところ、立正佼正会で2人の霊を慰める祭りがおこなわれることになったという²²⁾。

山田の人びとは、大島の景色と大島から見える風景を楽しみ、夏には大島の浜で海水浴をして遊んだ。いっぽう、大島は古くから弁才天が祀られる信仰の場所であり、20年ほど前までは、盆行事の一つが大島でおこなわれていた。島の坊は、そうした娯楽と信仰の場所である大島に埋められたのである。

近年、大島にかかわる出来事として、オランダ船プレスケンス号の山田湾入港事件は、島の坊伝説よりも、山田の人びとのあいだに浸透していると思われる。歴史的な記録に書かれているオランダ船の事件は、大島がオランダ島と名を変えてよばれるようになったことや、オランダ島祭りなどのイベントによって、いっそう広く人びとに知られるようになった。いっぽう、記憶によって伝承されてきた島の坊の出来事は、しだいに忘れられようとしている。

4 神になった島の坊

『聴耳草紙』版の「島の坊」伝説によれば、島の坊が殺され、大島に埋められた後、山田では不漁がつづく。人びとは、それを島の坊の怨霊の祟りと思い、島の坊の死体を掘り起こして、大杉神社に移して祀った。『聴耳草紙』版の島の坊伝説は、掘り起こされた島の坊の死体が、大杉神社に埋葬されたとしている。しかしべつヴァリエーションでは、掘り起こされた島の坊の死体は、山田町の竜昌寺の墓地に埋葬されたと伝えている。山田町の歴史を研究している佐藤源嗣は、竜昌寺にある「嶋坊」と刻まれた墓碑²³⁾が、大島から移された島の坊の墓であると推定し、島の坊伝説についてつぎのようにのべている。

天明年中当地へ何処からともなく来た一修験者某と当山田区の漁師達と何かの事で言い争い暴力沙汰となり、此人を多数で撲殺し港内の大島に埋葬した。所がそのためか、その年から不漁つづきとなつて漁師一同は困窮した。村民は誰言うもなく是れは此祟りであろうと恐れその怨霊を弔うため此地に移葬し尚柳沢の山地に一祠を建てた。此人の名をわからぬので嶋の坊と云つた。後村民は此地に漁神網場大杉の神霊を奉載して大杉神社と称へ嘉永年間に今の場所に移し祀つたものである。此場所は元松堡里山荘と言ひ貫堂卓堂氏の別館であつた。²⁴⁾

佐藤源嗣が島の坊の墓であると推定している墓碑の文字は、現在、判読することが困難なために、その墓がたして島の坊の墓であるのかどうかを断言することはできない。しかし、佐藤源嗣は、島の坊の祭祀にかんして重要な指摘をしている。島の坊の霊は、最初、柳沢の山地に祀られる。後に、漁神網場大杉の神霊が、島の坊の霊と同じ場所に祭祀され、その祭祀施設が大杉神社とよばれるようになる。そして嘉永年間(1848~1854)に、大杉神社は、貫堂卓堂氏の別館の松堡里山荘があった場所、すなわち現在の大杉神社が位置する山田町北浜の一面に移される。

どうして柳沢の山地が、島の坊の霊を祀る場所選ばれたのだろうか。また、どうして大杉神社は嘉永年間に柳沢の山地から北浜に移されたのだろうか。この二つの問いは、島の坊や大杉神社の祭祀をだれが中心になっておこなってきたかという問題と関連している。

大杉神社が嘉永年間に移転されるまで、柳沢家の屋号をもつ阿部家が島の坊と大杉神社の祭祀をおこなってきた。阿部家は、関東と魚の交易で財をなした豪商だったが、関東に派遣していた阿部家の番頭が大金を着服したために、没落し、大杉神社が祭祀されている「神さまの山」も売り払わなければならなくなったという²⁵⁾。おそらく、山田で阿部家が豪商として栄えていた時代に、阿部家が山田の人びと、とくに漁師たちを代表して、島の坊を神として祀るようになったと思われる。

「漁神網場大杉の神霊」は、アンバさまとか、大杉さまとよばれる神霊であり、関東から東北地方にかけて信仰されている。アンバさまの本拠の茨城県稲敷郡桜川村阿波の地には、耳目を惹くような杉の巨木が生えており、その大杉に神があらわれ、古くから大杉明神と信仰されていた。アンバ大杉信仰は、大杉明神の別当をつとめる天台宗の安穩寺の積極的な活動によって、江戸時代に急激な広がりをみせるようになった²⁶⁾。宮田登は、はやくからこのアンバ大杉信仰の流行神的な側面に注目していた²⁷⁾。大島建彦によれば、江戸時代のアンバ大杉信仰の広がりは、利根川水系と太平洋岸の水運業の発達とも関連しており、水上安全の守護神や漁業の神としてアンバ大杉信仰は、水運関係者のあいだにさかんになっていったという²⁸⁾。東北地方のアンバ大杉信仰にかんしては、川島秀一が概観しており、山田町の大杉神社についても言及している²⁹⁾。

柳沢家(阿部家)の伝承によれば、柳沢家の先祖が、関東に行ったときに勧請して、柳沢の山地に柳沢家の氏神として祭祀するようになったのが、山田町の大杉神社のはじまりだといわれている³⁰⁾。山田町のアンバ大杉の神霊は、柳沢家という有力者の信仰する神霊として祭祀されはじめたが、柳沢家の没落によって、アンバ大杉の神霊は、柳沢家の氏神的な神霊から山田の住民の信仰する神霊へと変容していった。アンバ大杉の神霊とともに祭祀されていた島の坊も、柳沢家の没落にしたがって、祭祀の場所とその担い手を変えることになった。

柳沢家の没落にあたって、山田の北浜に大杉神社の社地を提供した貫堂家は、笹家の屋号で知られる豪商だった。笹家は、江戸時代後期、南部藩の財政を支えるほどの豪商だったが、明治時代末期に没落したといわれている。

神になった無法者である島の坊の伝説は、関口や大島などの山田の過去を想起させ、そして山田の信仰の変遷を伝え、さらに山田という三陸海岸に望む集落の家の盛衰を内包しているといえよう。

付記：山田町の調査では、山田町史編さん資料調査委員の木下善太郎氏に竜昌寺の墓地を案内していただくなど、ご協力していただきました。感謝申し上げます。

注

- 1) 佐々木喜善『聴耳草紙』(ちくま文庫)、1993年。
- 2) 佐々木喜善『聴耳草紙』(ちくま文庫)、1993年。
- 3) 『山田町史 上巻』、1986年。
- 4) 『山田町史 上巻』、1986年。
- 5) 武藤 清「大杉神社に関する事」、2004年。
- 6) 石井正己「解題 遠野物語」『柳田国男全集 第二巻』、筑摩書房、1994年。
- 7) 『柳田国男全集 第二巻』、筑摩書房、1994年。
- 8) 柳田国男(久米長目)「山人の市に通ふこと」『郷土研究』第2巻6号、1914年。
- 9) 佐藤源嗣「長髪仙人之碑」『佐藤源嗣・貫洞貫一両先生郷土史研究遺稿集』、1965年。
- 10) 2004年9月の山田町関口における聞き取り調査による。
- 11) 佐々木喜善は、『聴耳草紙』で島の坊の伝説と髪長さんの伝説を混同している可能性もある。
- 12) 『山田町史 上巻』では、島の坊は天明年間(1781~88)に山田にやって来たとしている。
- 13) 『山田町史 上巻』、1986年。
- 14) 2004年9月の山田町関口における聞き取り調査による。
- 15) 『柳沢家文書』『山田町郷土史料集(第一集)』、山田町教育委員会、1963年。
- 16) 『岩手県下閉伊郡志』、1922年。
- 17) 2004年9月の山田町における聞き取り調査による。
- 18) 『柳沢家文書』『山田町郷土史料集(第一集)』、山田町教育委員会、1963年。
- 19) 『山田町史 上巻』、1986年。
- 20) 川瀬一郎「陸中物語9」『陸中タイムス』1979年3月10日号。
- 21) 佐藤源嗣「大島史蹟調べ」『佐藤源嗣・貫洞貫一両先生郷土史研究遺稿集』、1965年。
- 22) 『陸中タイムス』1975年8月22日号。
- 23) 佐藤源嗣は、墓碑の正面には、「嶋坊 大安了悟信士・直心了悟信士」、正面に向かって右側面には、「寛政元西星十一月六日前島より此処に移し而石碑建之」、左側面には、「寛政元年施主佐々木嘉右エ門」と書かれているとべている。
- 24) 佐藤源嗣「竜昌寺三供養之由緒」『佐藤源嗣・貫洞貫一両先生郷土史研究遺稿集』、1965年。
- 25) 2004年9月の山田町における聞き取り調査による。
- 26) 大島建彦編『アンバ大杉信仰』、岩田書院、1998年。
- 27) 宮田 登『江戸のはやり神』(ちくま学芸文庫)、1993年。
- 28) 大島建彦編『アンバ大杉信仰』、岩田書院、1998年。

- 29) 川島秀一『漁撈伝承』、法政大学出版局、**2003**年。
- 30) **2004**年**9**月の山田町における聞き取り調査による。